

令和 5 年 5 月 29 日現在

機関番号：13301

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2019～2022

課題番号：19K01111

研究課題名(和文)メソポタミア初期農耕社会の再編期における物質文化の基礎的研究

研究課題名(英文)Material Culture During the Reorganization of Early Farming Society in the Near East

研究代表者

小高 敬寛 (ODAKA, Takahiro)

金沢大学・GS教育系・准教授

研究者番号：70350379

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,400,000円

研究成果の概要(和文)：イラク北部の4遺跡から収集された後期新石器時代(前7～6千年紀)の土器資料を調査し、比較対照することで、伝統的な物質文化の時空間的枠組みを再検討した。前6000年前後には、北西方の北メソポタミアと、南東方の中部メソポタミアからイラク・クルディスタン地域南東部との間に、物質文化の地域差を見出した。また、前6千年紀半ば～後葉には、北メソポタミアの物質文化が周囲の地域に拡大したと考えられていたが、イラク・クルディスタン地域南東部では、他にもイラン高原からの影響などが確認された。これらの結果は、メソポタミアにおける都市化への移行の理解に関して、地域的多様性の観点から再考を促す。

研究成果の学術的意義や社会的意義

メソポタミアにおける都市化への移行過程は、現地の政情などの影響により、これまで20世紀半ばの調査研究成果にもとづく時空間的枠組みで語られてきた。本研究は、イラク・クルディスタン地域で得られた新資料とイラク北部の旧蔵資料を調査し、型式学的に比較対照したことで、この過程における時空間的枠組みを再検討するうえでの今日的な視座を提示した。近年の知見をもって過去の資料を見直し、その成果を近年得られた資料の研究に活かすという好循環を生み出すとともに、メソポタミアで起きた人類初の都市化を地理的により広範な歴史の動向と結び付けて説明する、確かな糸口になるだろう。

研究成果の概要(英文)：Late Neolithic pottery from four sites in north Iraq was comparatively examined to reconsider the traditional spatio-temporal framework of material culture in the Late Neolithic period (the 7th and 6th millennia BC). It demonstrated the regional difference between the northeast (upper Mesopotamia) and the southeast (from central Mesopotamia to the southeast part of the Kurdistan Region of Iraq) around 6000 BC. In addition, the influence of the Iranian plateau was identified in the material culture of the southeast part of the Kurdistan Region of Iraq in the mid-to-late 7th millennium BC, although, generally speaking, the upper Mesopotamian culture expanded to adjacent regions in this period. These results urge us to reconsider the transition to urbanization in Mesopotamia from the viewpoint of regional variability.

研究分野：西アジア考古学

キーワード：メソポタミア 肥沃な三日月地帯 新石器時代 社会再編 土器 遺跡調査

1. 研究開始当初の背景

人類初の新石器化から都市化への移行には初期農耕社会の再編が大きな役割を果たしたと思われるが、これを実証するには、新石器化の舞台 = 「肥沃な三日月地帯」と都市化の舞台 = メソポタミア低地とにまたがる、イラク各地の考古資料が欠かせない(図1)。イラクは長らく戦禍の中にあったものの、近年になってクルディスタン自治区で遺跡調査が再開され、こうした研究に着手する好機が訪れている。しかし、イラクの他地域では混乱が続いており、考古学的情報は未だ数十年前の調査報告に限られている。



図1 「肥沃な三日月地帯」とメソポタミア低地

2. 研究の目的

1 に示した状況を受け、本研究では以下の三つを目的として掲げた。

(1) かつてイラク各地で収集された既存の考古資料を調査することで、前7千年紀から前6千年紀にかけての後期新石器時代の物質文化を今日的な水準で改めて評価し、現在「三日月地帯」東翼部で蓄積が進む新資料と比較対照が可能な、考古学的情報の更新と整備を目指す。

(2) そして、実際にイラク・クルディスタン自治区で近年収集された同時代の考古資料を用いて、(1)で再評価されたイラク領内における他の各地の考古資料と比較対照を行ない、物質文化の時空間的な枠組みを改めて検討する。

(3) これらを通じて、前7千年紀末に始まる初期農耕社会の再編と「三日月地帯」の農耕民によるメソポタミア低地の開発、あるいは新石器化から都市化への移行との関係について、実証的研究するための基盤を構築する。

3. 研究の方法

上記の目的の達成に向けて、次にあげる(1)(2)を実施した。

(1) 研究の対象とする資料を獲得するため、次の ~ の調査を実施した。後期新石器時代(前7~6千年紀)の土器資料を標的としたが、一般に土器は資料数の多さ、そして属性の多様さと幅広さから、考古学的な文化編年ないし時空間的枠組みの構築に有効とされるため、本研究に最適の遺物といえる。いずれの資料に対しても、洗浄や分類といった基礎的な整理作業を行なった後、実測、写真撮影、属性観察等、考古学的なドキュメンテーションを実施し、記録を蓄積した。これらの記録は、効果的な情報発信と幅広い応用に備えてデジタル化した。

東京大学は1956~1966年に実施したテル・サラサート遺跡の発掘調査の折、イラク各地で53もの遺跡を巡検し、各遺跡で地表面に散布していた遺物を採集した。これらは日本に移送されたが、当時は必然的に発掘による出土資料の調査・研究が優先されたため、あまり活用されないまま東京大学総合研究資料館(現・博物館)に収蔵された。しかし今となっては、学史的に著名ながらも現地調査の困難な遺跡の資料を多数含む、貴重なコレクションといえる。本研究では、このコレクションのうち、テル・ハッスーナ遺跡の表面採集土器234点(うち後期新石器時代資料190点、5,091g)の調査を実施した。

研究代表者らは、2013年よりイラク・クルディスタン自治区シャフリゾール平原にて先史時代の遺跡調査を実施しており、調査によって得られた資料は、同自治区スレーマニ文化財局に収蔵されている。本研究では、そのうちシャカル・テベ遺跡の2019年発掘調査による出土土器(うち後期新石器時代資料約200kg、口縁部片のみで617点)について、調査を実施した。

また、2022年には同じくシャフリゾール平原に所在するシャイフ・マリフ遺跡 号丘を発掘調査した。本研究では、出土した土器のうち後期新石器時代の資料(約210kg、口縁部片のみで1,361点)について調査を実施した。

(2) 上の調査成果と、先行して実施していた東京大学総合研究博物館所蔵マタッラ遺跡の表面採集土器150点(うち後期新石器時代資料74点、3,298g)、シャフリゾール平原テル・ベグム遺跡の2013年発掘調査による出土土器(うち後期新石器時代資料1,180点)、同じくシャフリゾール平原シャイフ・マリフ遺跡 号丘および 号丘の表面採集土器(うち後期新石器時代資料238

点)の調査データを照らし合わせ、型式学的方法に即して物質文化の時空間的な枠組みを再検討した。各遺跡の資料に観察された諸属性を分析して、地域や時期ごとに物質文化のまとまりを見出し、それを従来の伝統的な編年観と比較対照することにより、時空間的な枠組みを見直した。また、その見直しに際しては、放射性炭素年代測定による補強を図った。

4. 研究成果

(1) 本研究の対象となった資料の出自であるイラク北部は、従来の編年観によれば、前6000年前後にはテル・ハッスーナ遺跡を示準遺跡とするハッスーナ文化が展開していたとされる地域である。調査した資料の多くは、その示準遺物であるハッスーナ標準土器として認識されてきた類のものであった(図2)。しかし、本研究の調査結果は、遺跡によって明確な属性の違いを示した。テル・ハッスーナ遺跡のハッスーナ標準土器は、胎土が粗めで、器面にスリップの施されるものが多い。外面にしばしば施される刻文には、ストロークの長い綾杉文や連続する三角形に並行斜線が充填された文様が顕著であり、他の装飾技法として、彩文もかなりの割合で存在する。これをハッスーナ標準土器のAタイプとする。いっぽう、シャカル・テペ遺跡やシャイフ・マリフ遺跡のハッスーナ標準土器は、胎土が精良でスリップは稀にしか施されない。刻文はストロークの短い斜線(いわゆるスラッシュ文)が連続的に施文されることが多く、彩文はごくわずかである。こちらをハッスーナ標準土器のBタイプとする。

(2) 先行して調査していたマタツラ遺跡の表面採集資料のうち、ハッスーナ標準土器はAタイプ、Bタイプの双方から成っていた。ただし、Bタイプは鉢形の器形に限られる。シカゴ大学が実施した1948年のマタツラ遺跡の発掘調査結果(Braidwood et al. 1952)からは、AタイプからBタイプへの時期的な変化が推測される。また、1943~1944年に行なわれたテル・ハッスーナ遺跡の発掘調査結果(Lloyd and Safar 1945)では、ハッスーナ標準土器の器形組成の主体が壺形から鉢形へと時期的に変化することが示されている。したがって、AタイプからBタイプへの変化の可能性が支持される。

(3) しかし、今のところシャフリゾール平原にAタイプは皆無であり、シャカル・テペ遺跡の発掘調査結果から、ハッスーナ標準土器Bタイプに直接先行する土器アセンブリッジは、粗製のスサ混和土器のみで構成されるアセンブリッジであることが判明している。粗製のスサ混和土器はテル・ハッスーナ遺跡でAタイプに先行する原ハッスーナ土器に類似しており、放射性炭素年代から、両者は時期的に併行することが示された。

(4) 既刊文献から他遺跡におけるハッスーナ標準土器の様相を調べたところ、マタツラ遺跡と同じく、大ザブ川流域の遺跡ではAタイプとBタイプの双方が混在していた。Aタイプの分布はこれらの遺跡を結ぶ線より北西方の北メソポタミア、Bタイプの分布は南東方の中部メソポタミアからイラク・クルディスタン地域南東部であり、地理的分布を違えることが分かった。

(5) 以上をまとめると、ハッスーナ標準土器AタイプとBタイプは基本的に地域差を反映していると考えられる。ただし、マタツラ遺跡では、当初Aタイプが主流であったが、時期が下るとBタイプへと変化していく。ハッスーナ文化はテル・ハッスーナ遺跡を示準遺跡としているがゆえ、Aタイプの分布遺跡が典型例であり、Bタイプの分布遺跡は地域的な変種とみなされがちかもしれない。しかし、実際のところ、BタイプはAタイプと同時期に登場しており、しかも、AタイプがBタイプに淘汰される遺跡(マタツラ遺跡)が存在する。したがって、従来のハッスーナ文化の枠組みは再考されるべきである事実を示すことができた。

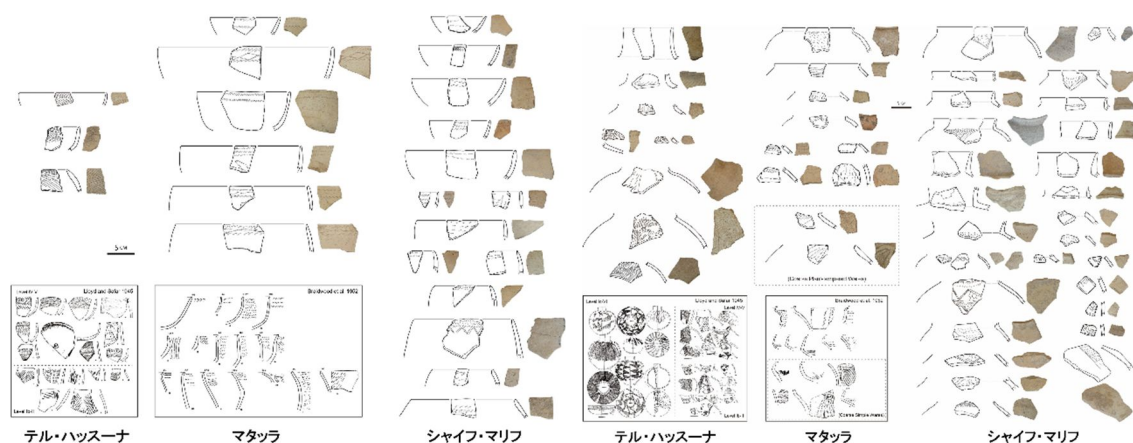


図2 ハッスーナ標準土器 (左)鉢形 (右)壺形

(6) テル・ベグム遺跡で出土した後期新石器時代の土器(図3)は、ハラフ土器と呼ばれる型式のものであり、シャフリゾール平原においてハッスーナ標準土器に後続すると思われる。放射性炭素年代は、前6千年紀半ばから後葉にかけての年代を示した。これは、北メソポタミアを中心に分布するハラフ文化の年代幅においても遅い時期にあたり、都市化の方向性が露わになっていくウバイド文化への移行を示す、ハラフ=ウバイド移行期に相当する。シャフリゾール平原ではこれよりも年代的に遡るハラフ土器は知られておらず、またその地理的分布のなかで最東端に位置することから、分布拡大の最終段階で到達した辺境のハラフ土器であると評価できる。型式学的方法に即してその属性を検討したところ、胎土へのスサの混和、白色彩文の多用、具象文の欠如といった、北メソポタミアで見られるようなハラフ土器の典型例とは異なる、地域的な特徴が認められた。こうした特徴の一部は、イラン、マヒダシュト平原のJウェアと呼ばれる土器などと共通する。つまり、ハラフ土器の故地である北西方だけでなく、東方との関係性が示唆される。年代的にはハラフ=ウバイド移行期に併行するが、土器の諸属性はかなり特異であり、地域的多様性の観点から、都市化への移行を再考するための一視点を提供することができた。

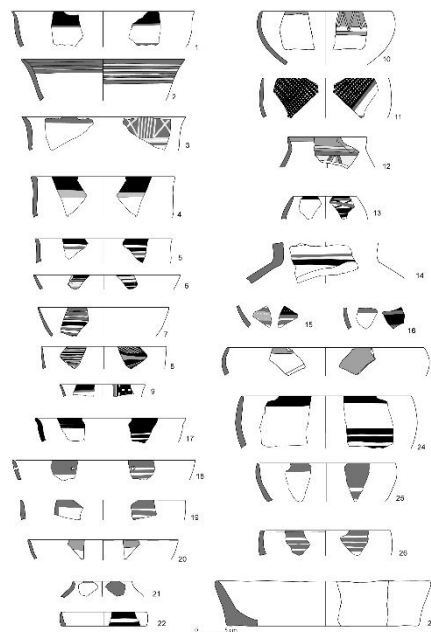


図3 テル・ベグム遺跡出土
ハラフ土器

<引用文献>

Braidwood, R.J. et al. 1952. Matarrah: A Southern Variant of the Hassunan Assemblage, Excavated in 1948. *Journal of Near Eastern Studies* 11(1): 1-75.
Lloyd, S. and F. Safar 1945. Tell Hassuna: Excavations by the Iraq Government Directorate General of Antiquities in 1943 and 1944. *Journal of Near Eastern Studies* 4(4): 255-284.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計7件（うち査読付論文 5件/うち国際共著 6件/うちオープンアクセス 6件）

1. 著者名 T. Odaka, O. Maeda, T. Miki, Y. S. Hayakawa, P. Yewer, H. Hama Gharib	4. 巻 1
2. 論文標題 Excavations at Shaikh Marif, Iraqi Kurdistan: Preliminary Report of the First Season (2022)	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 Ancient Civilizations and Cultural Resources	6. 最初と最後の頁 1-22
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 該当する
1. 著者名 小高敬寛, 前田修, 三木健裕, 早川裕弐, P. イェウエル, H. ハマ・ガリーブ	4. 巻 -
2. 論文標題 新石器化と都市化のはざま - イラク・クルディスタン、シャイフ・マリフ遺跡の第1次発掘調査（2022年）	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 第30回西アジア発掘調査報告会報告集	6. 最初と最後の頁 36-41
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 該当する
1. 著者名 T. Odaka, O. Nieuwenhuys	4. 巻 57
2. 論文標題 Halaf Pottery in the East End: Insights from Tell Begum, Iraqi Kurdistan	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 Orient	6. 最初と最後の頁 113-124
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 該当する
1. 著者名 T. Odaka	4. 巻 -
2. 論文標題 Neolithic Potsherds from Tell Hassuna: The Collection of the University Museum, the University of Tokyo	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 Neolithic Pottery from the Near East: Production, Distribution and Use	6. 最初と最後の頁 169-179
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 小高敬寛, 前田修, 下釜和也, 早川裕弐, 西秋良宏, N. A. ムハンマド, K. ラシード	4. 巻 -
2. 論文標題 新石器化と都市化のはざま - イラク・クルディスタン、シャフリゾール平原の先史遺跡調査 (2019~20年) -	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 第28回西アジア発掘調査報告会報告集	6. 最初と最後の頁 14-19
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 該当する

1. 著者名 T. Odaka, O. Maeda, K. Shimogama, Y. S. Hayakawa, Y. Nishiaki, N. A. Mohammed, K. Rasheed	4. 巻 2020
2. 論文標題 Late Neolithic in the Shahrizor Plain, Iraqi Kurdistan: New Excavations at Shakar Tepe, 2019	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Neo-Lithics	6. 最初と最後の頁 53-57
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 該当する

1. 著者名 T. Odaka, O. Nieuwenhuys, S. Muehl	4. 巻 45(2)
2. 論文標題 From the 7th to the 6th millennium BC in Iraqi Kurdistan: A local ceramic horizon in the Shahrizor Plain	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 Paleorient	6. 最初と最後の頁 67-83
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 該当する

〔学会発表〕 計9件 (うち招待講演 0件 / うち国際学会 2件)

1. 発表者名 小高敬寛, 前田修, 三木健裕, 早川裕弐, P. イェウェル, H. ハマ・ガリーブ
2. 発表標題 新石器化と都市化のはざま - イラク・クルディスタン、シャイフ・マリフ遺跡の第1次発掘調査 (2022年) -
3. 学会等名 第30回西アジア発掘調査報告会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 小高敬寛
2. 発表標題 文明前夜のメソポタミア東縁部 - シャフリゾール平原の先史遺跡調査 -
3. 学会等名 金沢大学超然プロジェクト「古代文明の学際研究の世界的拠点形成」成果報告会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 小高敬寛
2. 発表標題 新石器化から都市化への移行をめぐって - メソポタミア東縁部シャフリゾール平原の先史遺跡調査 -
3. 学会等名 第62回北陸史学会大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 T. Odaka
2. 発表標題 Investigating the Late Neolithic in the Shahrizor Plain: Tell Begum, Shaikh Marif and Shakar Tepe
3. 学会等名 International Conference, Revisiting the Hilly Flanks: The Epipalaeolithic and Neolithic periods in the Fertile Crescent (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 T. Odaka, O. Maeda, K. Shimogama, Y. S. Hayakawa, Y. Nishiaki, N. A. Mohammed, K. Rasheed
2. 発表標題 Investigating the Late Neolithic in the Shahrizor Plain, Iraqi Kurdistan: Excavations at Shakar Tepe, the first season (2019)
3. 学会等名 12th International Congress on the Archaeology of the Ancient Near East (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 小高敬寛, 前田修, 下釜和也, 早川裕弐, 西秋良宏, N. A. ムハンマド, K. ラシード
2. 発表標題 新石器化と都市化のはざま - イラク・クルディスタン、シャフリゾール平原の先史遺跡調査 (2019~20年) -
3. 学会等名 第28回西アジア発掘調査報告会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 小高敬寛, 前田修, 下釜和也, 早川裕弐, 西秋良宏, N. A. ムハンマド, K. ラシード
2. 発表標題 イラク・クルディスタン、シャカル・テベ遺跡の後期新石器時代層
3. 学会等名 日本オリエント学会第62回大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 小高敬寛
2. 発表標題 いわゆるハッスーナ土器の地域差について
3. 学会等名 日本西アジア考古学会第24回大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 小高敬寛
2. 発表標題 テル・ハッスーナ遺跡で採集された新石器時代の土器
3. 学会等名 日本西アジア考古学会第24回大会
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

Zagros Piedmont Prehistoric Project
<https://zpp-project.blogspot.com/>

ザグロス山麓先史考古学プロジェクト
<https://zppp-jp.blogspot.com/>

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関			
イラク	クルディスタン地域政府文化財局			
ドイツ	ベルリン自由大学	ルートヴィッヒ・マクシミリアン大学ミュンヘン		
オーストリア	ウィーン大学			